国際結婚によって来日した言語少数派の母親は第二言語環境でどのような世界を創り上げているか
―TAE を用いた質的研究の可能性―

白田　千晶

1. はじめに

地球規模の急速な人の大移動によって、他国の人と接触する機会が増加し、日本においても世界各国からビジネスや留学等の目的で来日する外国人が増えるとともに、長期にわたる赴任、また、配偶者として日本社会に参入するといった「定住化」の傾向が強まっている。増えつつある定住者の中には、日本人配偶者として来日した者も多く、新たな国際化の流れの中で「国際結婚」は、大きな比重を占めている。婚姻総数に占める国際結婚の割合は、1965 年には 0.4%だったが 1980 年代に入ると 1 %を越え、現在では、15 組に 1 組の夫婦が国際結婚だといわれている。国際結婚はもはや特別な結婚形態ではなくなったが、未だ母親の母文化が受け継がれにくいことや子どもの二重国籍を認められていないなど、多くの問題も残されている。

国際結婚の中でも、特にアジア圏出身女性は、欧米出身の女性に比べ、自分の母語を日常的に使用できないなど不利な状況にあると言われる。また、夫婦間や家庭内での力関係は、自分の国の母語でコミュニケーションをとる配偶者の方が有利になりがちであり、子育てにおいては、自分の文化やアイデンティティーを継承したい、また子どもをバイリンガルにしたいという思いはあるが両親の言語・文化を子どもに継承していくことが難しいことから、母語や文化を子どもに継承していくことをあきらめてしまうケースも多い（石河 2003）。

本研究では、シンガポール出身の女性に焦点を当てる。様々な国際結婚のスタイルや生活スタイル、個人の価値観や考え方があることを視野にいれ、今まで生きてきた母国から、言葉や文化・習慣が全く違う社会に参入することが当事者にどのような影響を与えるのかを検討する。個人の生き方や価値観に焦点を当てることによって、これまで一般化され、見えてこなかった問題や課題が明らかにし、どのようなサポートが可能か提案する。

2. 先行研究

国際結婚によって来日したアジア出身女性を対象とした研究として、桑沢(2005)、石河(2003)などがある。桑沢(2005)では、山形県に嫁いだフィリピン人妻たちに対して数年に渡って、フィールド調査を行ない、彼女たちの受けているストレスを調査した。そこでは、ストレスの受け方には段階があり、段階によって心理状況や行動が変化していく過程が報告されている。

また国際結婚夫婦における夫婦間コミュニケーションに着目した研究に、伊藤(2006)がある。伊藤は国際結婚夫婦の妻に焦点をあて、夫婦コミュニケーションについてジェンダーと国際結婚の２つの観点から問題点を探った。そして、外国人妻の抱える問題として生活の場での言語・コミュニケーションの問題と夫婦間のコミュニケーションの問題を挙げている。

いずれの研究も社会全体の意識や制度の見直しを強く指摘している。個人の問題ではなく、周囲の人々の関わり方など、周りとの関係性を変化させることによって多文化共生に近づく可能性を示唆した点で意義がある研究と言えるが、賽(2006)は、多くの質的研究において日本に同化していくアジア人女性として画一的に描かれ、主体性が明確に浮き彫りにされにくくなっていることを問題視している。

本研究では、様々な国際結婚のスタイルや生活スタイル、個人の価値観や考え方があることを視野にいれ、これまで一般化され、見えてこなかった問題や課題を明らかにする。

3. 調査の概要

3.1 研究目的と研究課題

本研究では、国際結婚によって来日した女性に焦点をあて、マイノリティーの女性が第二言語環境でどのような価値観や考えを創り上げているのかを明らかにし、多文化共生の可能性を探る。

研究課題は以下の通りである。

RQ1: ある言語少数派女性は第二言語環境でどのような価値観や考えを創り上げているか。

3.2 調査対象者

日本人の夫との結婚によって 30 年前にシンガポールから来日した女性。仕事をしながら子どもを 2 人育て、現在は子育てが一段落し、英語教師の仕事を生きがいとしている。母語は中国語とマレー語。家庭内での言語は日本語と英語を使用している。

3.3 調査方法

半構造化インタビューを約 1 時間半×2 回行った。国際結婚、家庭、仕事に関する事柄を中心に自由に語ってもらい、内容に合わせて質問事項は変更した。

3.4 分析方法

アメリカの哲学者 Gendlin が開発した理論構築法である TAE (Thinking At the Edge)を用いて分析する。TAE は分析者が身体感覚であるフェルトセンスを使いながら「はっきりと言葉にならないが、あることは分かっている何か」(暗黙知) を理論化する過程を 14 ステップにまとめ、技法化したものであり、これによって身体的な暗黙知を言語化し、構造化することが可能になる。

3.5 分析過程

分析は以下の手順で行なった。まず 1 回目のインタビューにより収集した録音データを文字化し、それに2回目のインタビューの文字データを追加しトランススクリプトを作成した。分析は分析者とガイドの2人組みになり、TAE のステップに即して進めた。ガイドは分析がスムーズに進むよう分析者の自問自答を促したり、分析記録をとったりする役割を担う(得丸・清水 2008)。

(1)フェルトセンスを形にする。

「J さんの感じ」を意識しながら「強がり」「隠す」「乗り越える」の 3 つのキーワードを抽出した。

(2)中核を一文で表す。

J さんは「明るく振る舞い、強がっている」。

(3-4)キーワードが辞書の定義と違うことに気づく。

＜強がり＞誰も助けてくれない、お金が重要

＜隠して＞自分の弱みは外に出さない

＜乗り越える＞妥協することで、満足している

(5)再び中核を一文で表現する。

「明るく振舞いつつも、強がって、生きている」

(6)データから実例を集める。

データの中の具体的な事例を全 27 抽出。

(7)各事例が詳細な構造を与えるようにする。

27 の実例から、パターン(繰り返し現れる可能性のある特性) を抽出した。

(8)各パターンを交差させる。

フェルトセンスと対応させながら、新たに浮かび上がってくる概念を書き留めた。

(9)気づいたことを自由に書く。

(10-11)重要と思われる用語を選び連結する。

A「生きるパワー」B「強みと強がり」C「人間が好き」の 3 語を選んだ。

AB「生きるパワーは強みと強がりから成り立つ」

BC「強みと強がりは彼女を人間好きにさせる源である」

CA「人間が好きなことは、強みと強がりを生み出す」

(12 前半)最終的な用語を選び、それらを組み込む。

A「人と関わる」B「認められたいと思う気持ち」

C「居場所」

1.人に認められたいと思う気持ちから、人と積極的に関わって、居場所を作っていく。

2.居場所は人との関わりの中で、自分が認められたいと思う気持ちから作られる。

(12 後半)さらに必要だと思われる単語を追加していき、一文にまとめる。

A「人と関わる」B「認められたいと思う気持ち」

C「居場所」D「強み」E「強がり」F「弱み」

＜J さんの理論＞

理論 1「人と関わることは、認められたいと思う気持ちから、強みを活かし、弱みを人に見せないように強がり、居場所を作っていくことである。」

これは、夫は弱みを見せられる存在であってほしけれども現実にはそうではないことを示してる。

理論 2「人と関わることは、居場所の中で人に強みを認められたいと思う気持ちと、弱みを見せずに強くなりたいと強がることによって、深まっていく。」

理論 3「認められたいという気持ちは、居場所の

中で強みを認められ、人と関わりが深まるほど強くなる。しかし、強がっている面もあり、本当は弱みをわかってほしい部分もある。」

理論 4「居場所は、人との関わりの中で強みを認められたいと思う気持ちから作られている。弱みを見せまいと強がっている気持ちをわかってもらえる居場所もある。」

4. 結果と考察

J さんにとっては、「強みを認めてもらう場所」と「弱みを分かってもらえる場所」の両方が必要なことが分かった。また、2 つの居場所で自分がうまくバランスがとれているときは、生活もうまくいっていると感じていることが分かった。

自分の「強み」を認めてもらいたい場所は仕事の現場と子育ての場における自分である。また、日常的なコミュニティーでは、日本人に負けないようにと強がっており、本当はその気持ちを分かってもらいたいけれども、なかなか分かってもらえないことがフラストレーションになっている。J さんにとって、この「強がっている自分」や「本当は弱い自分」を分かってもらえる場所は日本では教会である。また、電話などでシンガポールの家族や友人と話しているときも心の居場所を得られる。

地域のコミュニティーの中では「言わなくてもわかってほしい」ことがたくさんあるがなかなか日本人に分かってもらえないことも多い。また一般的に家庭は、自分を素直に出せる場であり、また精神的な安らぎを得ることができる場所であるはずだが、J さんは家庭で自分の居場所を得ることができなかった。そのために、自分を認めてもらう場所として仕事を選び、仕事を「頑張る」ことによって生きるパワーを得ている。

一方で、「教会」「神」といった自分の「弱み」を分かってもらえる場所もある。そこは、苦しみから逃れ、生きるパワーを得る場でもある。J さんに場合、「強みを認めてもらう場所」と「弱みを分かってもらえる場所」が生活の中で密接に関わっており、それぞれが相互に作用し合っている。そして、2 つのバランスがうまくとれているときには、自分の生活もうまくいっていると感じていることが分かった。

本研究ではステップ 12 までを行なった。ステップ 12 の概念の相互定義で理論作りが完了する。ステップ 13,14 は作った理論を、テーマとする領域以外のところに応用し、さらにテーマとする領域に再適応して、気づきを得るステップである。

5.まとめと今後の課題

TAE を用い分析したことによって、国際結婚によって来日し、30 年以上に渡って異文化を体験している J さんが、どのような価値観や考え方を持って生きているのかを明らかにすることができた。彼女の持つ世界が、周囲との関係によって創られていると考えたときに、この関係性を明らかすることは、身近に住む異文化を持つ人々との関わり方を考えるきっかけとなる。

グローバル化の中で、増え続ける国際結婚は画一的ではなく、さまざまな形が存在する。今後は、対象の幅をさらに広げ分析し、より多くの人の価値観や考え方を検討していくことを課題としたい。また、サポートを追及し、多言語多文化共生社会実現のための実践を日々行なっていきたい。

参考文献

桑山紀彦(1995)『国際結婚とストレス－アジアからの花嫁と変容するニッポンの家族』明石書店

木村真理子(1997)「文化変容ストレスとソーシャルサポート－多文化社会カナダの日系女性たち－」東海大学出版会

徳井厚子(2002)『多文化共生のコミュニケーション 日本語教育の現場から』アルク

得丸さと子(2008)『TAE による文章表現ワークブック』図書文化

しらた　ちあき／お茶の水女子大学大学院　比較社会文化学専攻

chiaki920.s@gmail.com